

東洋史研究

第六十九卷 第四號 平成二十三年三月發行

古鏡研究一千年

——中國考古學のパラダイム——

岡村秀典

はじめに

- 一 古鏡研究のルネッサンス——宋明代における古鏡研究の三派
- 二 民俗と歴史への關心——類書の編纂と江戸時代の中國古鏡研究
- 三 清朝考證學と鏡銘の研究
- 四 戦前における日本の中國古鏡研究——編年重視の考古學
- 五 戦前における歐米の中國古鏡研究——シノロジーとしての考古學
- 六 戦後の中國古鏡研究——日本・中國・歐米における多様な研究の融合
おわりに

はじめに

歐米の考古學は、一九世紀にダーウインの進化論をうけて石器時代・青銅器時代・鐵器時代という三時代法や石器時代

の層位學的研究が生まれ、二〇世紀前半にはヨーロッパに擡頭したナチズムなど民族主義をうけて考古學文化と民族の時間間を論じる文化史考古學がはじまった。一九六〇年代になると、アメリカ合衆國の世界戰略をうけて世界に普遍化できる人類學としてのニューアーケオロジー（プロセス考古學）運動がおこり、一國史的な文化史考古學はするどく批判されるが、一九八〇年代には普遍性の影で輕視されてきた文化傳統や社會的弱者にも目を向け、考古資料にあらわれた象徴性に注意するポストプロセス理論が提唱されるようになった。歐米における一九世紀以來の考古學理論は、このように科學全體のパラダイムに大きく左右されてきたのである（Trigger, B. G., *A History of Archaeological Thought*, Cambridge, 1989）。これにたいして中國や日本では、文獻史學の長い傳統や二〇世紀前半の文化史考古學が西歐から導入されたこともあって、一國史の枠組みから脱却することなく、こんにちまで文化史考古學の傳統が根強くつづいている。

しかし、近世にさかのぼって中國の學術史をかえりみるならば、研究の主たる擔い手は士大夫ら科擧官僚であり、政治的實踐の一環として學術研究が位置づけられたため、そのパラダイムはいきおい實用主義の様相を呈したのであった。儒學の流れをみると、唐代の訓詁學を否定して朱子學に代表される宋學が生まれ、その性理學を批判して古典の考證をもっぱら重視する漢學が清代の主流となった。宋代にはじまる金石學は宋學の一分野であり、清代の金石學は考證學の一分野として發達した。そして一九二〇年代にはじまる中國考古學は、こうした漢學とは別に、歐米の文化史考古學を受容することによって出發したのである。

ここでは宋代以來一〇〇〇年におよぶ古鏡研究について、中國學術のパラダイムに照らして検討するとともに、日本や歐米における中國古鏡の研究がそれどのように連關して展開してきたかを論じる。古鏡研究に着目することによって、宋代にはじまる金石學がそのまま清代に繼承され、近代の考古學の底流をなしているという、これまでの單線的な研究史を再検討しようとする試みである。

金石學のはじまり 宋學として新たな展開をみせた儒學は、中世のゆきづまりを打開し、古代の理想的な禮制に回歸するため、古代の祭器や樂器を範として新しい禮器をつくることを推奨した（貝塚茂樹『中國古代史學の發展』、弘文堂、一九四六年）。後漢の鄭玄『三禮圖』を参考に、聶崇義は禮器にみえる禮器を圖解する『新定三禮圖』（九六二年）を編纂し、呂大臨は宮廷や民間に收藏する古銅器を調査して『考古圖』全一〇卷（二〇九二年）をまとめた。そこでは銅禮器の見取圖や銘文の拓本が描き起こされたほか、法量・所藏者・出土地・器名や用途の考證など、考古學の基礎データが詳しく記録されたのである。

これをうけて一一〇七年ごろ徽宗が黃伯思らに命じて編集し、一二二三年以後に王黼に命じて新收の銅器を加えたのが『重修宣和博古圖録』全三〇卷である（容庚『宋代吉金書籍述評』『慶祝蔡元培先生六十五歲論文集』下冊、國立中央研究院、一九三五年）。収録されたのは銅禮器が中心だが、末尾の卷二十八から卷三十に漢代と唐代の鏡一一二面をはじめて著録した。鏡の名稱は時代（漢または唐）＋紋様または銘文＋鑑で統一され、線畫の描き起こし圖、銘文の釋文、面徑・重さ・銘文の字數などを記録することは爾後の模範となった。卷二十八「鑑總說」において、紋様にもとづいて鏡を乾象門・水浮門・詩辭門・善頌門・枚乳門・龍鳳門・素質門・鐵鑑門の八門に分類したことにも注目したい。易學の影響をうけて、鏡を宇宙の表象とみでの分類法である（岡村秀典「宋明代の古鏡研究——青柳種信の參考にした漢籍」「九州と東アジアの考古學」九州大學考古學研究室五〇周年記念論文集、二〇〇八年）。『宋史』卷四百四十三（文苑五）によると、撰者の黃伯思は、字は長睿、六經・歷代史書・諸子百家・天官地理・律曆・卜筮の説に通じ、また古文奇字に親しみ、道家をすこぶる好んだという。遺稿集の『東觀餘論』一〇卷（一二四七年）には「青羊作竟四夷服」銘の漢鏡と「仙山竝照」銘の唐鏡を載せる。

しかし、宋の公私コレクションは、靖康の變（一二二六年）による金軍の略奪をうけて、ほとんど失われた。そのため

か、南宋の金石學は、古銅器の實物を調査して圖や法量など考古學データを記録することがなく、たんに銘文を収録するだけとなった。古鏡の著録としては洪适『隸續』(一一六八―一一七九年) 卷十四や王俅『嘯堂集古錄』(一一七六年の跋) 下に數面の鏡の釋文を収録しているにすぎない。

下って明後期になると、古詩にたいする關心が高まるなかで、古鏡の銘文がふたたび文人たちによってとりあげられるようになった。楊慎『丹鉛總錄』卷八、張之象『古詩類苑』卷百十五、馮惟訥『古詩紀』卷百五十六は『博古圖錄』から漢唐鏡の釋文をいくつか採録している。やや後出する梅鼎祚『東漢文紀』卷三十二は、これら同時代の論著を比較しつつ、鏡銘にたいする獨自の見解を述べている。たとえば、『博古圖錄』に収録する『漢册禮鑑』の「吾作明鏡、幽凍三商」という釋文をあげ、その「三商」について同時代の徐獻忠『金石文』の說を引いて「古への冶鏡は金氣の盛んなるを取り、鍊るに三歳、或いは三月を以てし、周の乾坤五五の數を以てする故に「三商」と曰う。」という考證をおこなっている。また、『漢尙方鑑銘』において、『博古(圖錄)』は「神人鑑」に作る。「上」は即ち「尙」なり。」と注し、銘文に記された作鏡者の「上方」は宮廷用品を制作する官營工房「尙方」の假借としている。こうした語注はつぎの清朝考證學への芽ばえとして評價できるだろう。

古鏡の科學 宋代には實學としての自然科學的研究がはじまった。本草學・音樂・天文曆法・水利・軍事などの面で王安石の新法を推進していた沈括は、晩年にそれまでの經驗をふまえた隨筆『夢溪筆談』を著した。そこには自然科學にかんする研究のほかに、卷三「辯證」には凹面鏡(陽燧)の光學的現象について、卷十九「器用」には凸面鏡の光學的性質や透光鏡(魔鏡)の現象についての分析がある。とりわけ魔鏡については一九世紀に歐米の自然科學者たちの注目を集め、新中國では夏鼐『沈括和考古學』(考古)一九七四・五)や陳佩芬『西漢透光鏡及其模擬試驗』(文物)一九七六・二)などの成果をみちびいた。

沈括ののち古鏡の科學的な觀察はしばらく跡を絶っていたが、明末に西洋文明の刺激もあつて實學が重んじられるなか

で古鏡の物理化学的な特徴がふたたび注目されるようになった。宋應星『天工開物』（一六三七年）は儒學の立場から「周禮」考工記などにみる傳統的な技術を整理したものであり、古鏡の鑄造技術についても議論している。方以智『物理小識』（二六六年）巻八は「陽燧倒影」・「鏡光」・「鑄法」・「鏡背紋」という項目により古鏡を分析している。たとえば透光鏡については、沈括が鏡背紋の凹凸に着目したのにたいして、方以智は成分のちがう二種類の銅合金を用いて鑄造したために銹や色のちがいで紋様が浮かびあがると考えた。

文人趣味 風流天子とあだ名された宋の徽宗は、全國から書畫骨董を集めさせ、『宣和博古圖録』のほか『宣和畫譜』や『宣和書譜』など繪畫・墨跡の圖録を敕撰した。しかし、新舊兩黨の抗争に加え、その『玩物喪志』（『宋史』本紀の贊）が一因となって失政をまねき、靖康の變で欽宗とともに金に拉致された悲劇の君主でもあった。

南宋になると、文人たちの書畫・骨董・文房具にたいする趣味が高じ、古銅器の鑑識がさかんに論じられるようになった。張世南『游宦紀聞』（二二四年または二三三年）や趙希鵠『洞天清錄』（二二四〇年ごろ）は、青銅器の蠟型鑄造法や贗作の方法のほか、純青色の「土中古」、玉のような純綠色の「水中古」、朱砂の斑紋がある「傳世古」などの銅色により古銅器を鑑定する方法を説いている（中田勇次郎譯注『文房清玩』Ⅰ、二玄社、一九六一年）。こうした古銅器の清玩にあっては、金石學とちがって、銘文の釋讀にはほとんど關心をもたれなかった。ただし、銘文の字形については、それが時代の特徴をあらわし、眞贋の判別にも有効なため、一定の注意が拂われた。元明代にも陶宗儀『輟耕錄』（一三六七年ごろ）巻十七、曹昭『格古要論』（一三八七年）、高濂『遵生八牋』（一五一九年序）巻十四、郎瑛『七修類藁』巻四十一などが古鏡の鑑識を論じているが、ほとんどが『游宦紀聞』や『洞天清錄』からの引き寫しである。これら退廢的ともいえる文人趣味の古鏡研究は、考古學史のなかでとりあげられることはほとんどないものの、一九世紀末まで一定の影響をもったことは次章に述べる。

二 民俗と歴史への關心——類書の編纂と江戸時代の中國古鏡研究

民俗學的關心

宋時代の古鏡研究は以上の三派にまとめられるが、古文獻にみえる鏡の傳承は、唐の虞世南『北堂書鈔』卷百三十六、歐陽詢『藝文類聚』卷七十、徐堅ほか『初學記』卷二十五、宋の『太平御覽』卷七百十七など唐宋代の類書に収集されている。明清代にも李時珍『本草綱目』（一五七八年）卷八、陳耀文『天中記』（一五九五年）卷四十九、陳元龍『格致鏡原』（二七〇七—〇八年）、康熙帝敕撰の張英ほか『淵鑑類函』（二七〇年）などが編集された。それは鏡がどのように使われていたのか、姿を映すほかにどのような效能があると考えられていたのか、というような考古學では知りたいことがらについての情報を傳えている。中世の志怪小説から多く採録されたこともあって、金石學の參考にするところは少なかつたが、金石學が衰え、明代の文人たちに類書編纂の氣運が高まるなかで、古鏡をめぐる民俗にも關心が寄せられるようになった。明末の謝肇淛『五雜俎』（一六一九年）はそのひとつで、卷十二「物部」四に古鏡をめぐる傳承がまとめられている。なかでも明代に山東・河南・關中で募泥棒が横行し、臨淄では古鏡の贋作、洛陽では古鏡を利用して鑪がつくられていたというのは、明末の社會情勢がかいまみえて興味深い。

日本の國學にたいする影響

福岡縣前原市の三雲南小路では一八三二年に前漢鏡三五面をふくむ大量の遺物が出土した。その南に隣接する井原鍵溝でも一七八〇年代に前漢鏡二一面あまりが出土しており、福岡藩の青柳種信はさっそく現地を調査し、「三雲古器圖考」（一八三三年）と「同郡井原村所穿出古鏡圖」（一八三三年）に詳しい記録をとどめた（兩編とも青柳『柳園古器略考』所收）。それらは出土鏡や拓本の描き起こし圖、固形墨による乾拓、出土状況や出土品の解説、年代考證などからなり、同時代の中國にも例をみない詳細な考古學調査の記録である。人骨など墓を證明するものが出土していないことから、これを祭祀遺跡とみる説が提起されていたが、本居宣長門下の國學者であつた青柳は、

此掘出せし地、當村の産神佐々禮石神社に無下に近ければ、むかし祭奠の盛なりし時に、祭器を埋たるならむといふ

人も有。これもさること無とは謂難けれども、葬具といふかた近からむか。西土にて棺に鏡を懸(懸)たりしことあり。怡土國王の名、古く彼國の史籍に見へたれば、早く西土に通ひて稍かの風俗に習ひて、ここにもせしなるべし。此たび出たる物、皆西土の器にして、皇國の古物に非ず。是を以て推ときは、いよいよ葬具とおもはるゝ也。この頃、明の瑛仁寶といふもの、書に『七修續彙』をみるに、其説に曰、「世之古鏡多出北地古墓。人知而寶之。未知墓出故也。按『漢書』霍光傳光喪賜東園出鏡之所。予恐溫明鏡名也。又按『癸辛雜識』云、世大殮後用鏡懸蓋。蓋以照屍。取光明破暗之義。據此二書則知鏡在於墓。其來已遠。而取義亦明白也。意其開一墓而得鏡不一。似古人送葬者皆贈之如今人之綿箱耳」とあり。此説よくここにかなへり。(後藤直「青柳種信の考古資料(一)」——三雲南小路と井原鑓溝に關する資料『福岡市立歴史資料館研究報告』五、一九八一年の釋文を一部改變)

と論じて墓説を主張した。すなわち、明の郎瑛『七修續彙』卷六は、『漢書』霍光傳とその服虔注、および南宋の周密『癸辛雜識』續集下を引いて、古代中國には多くの鏡を棺に懸ける習俗がみえることを論じており、青柳はそれをそのまま引用するとともに、三雲出土の鏡はすべて中國製であること、倭の怡土國王が中國との通交により懸鏡の習俗をとり入れた可能性があることから、三雲では古代中國に倣った葬送儀禮がおこなわれていたと考えたのである。

三雲出土鏡の年代について、青柳は重圈銘帶鏡の「第三圈にハ識あり。隸書凡四十字、……第七圈に文字廿三字。書體隸にあらざ古文なるべし。いづれも凹入に非ず。凸起也」と同一鏡に隸書と古文の兩方が陽文で用いられていることをあげ、『洞天清錄』に銘文が「漢は小篆隸書を以てす」とあり、『游宦紀聞』が「識は陽字を謂うなり」とあるのを引いて、青柳はすべて漢代の鏡の特徴とみなした。また、宋の李石『續博物志』や『游宦紀聞』、元の『輟耕錄』、明の都穆『鐵網珊瑚』を引いて、銅色や鏽の状態が中國古鏡と類似することを指摘し、『夢溪筆談』をもとに鏡面の凹凸と大小を論じている。後述のように古鏡を金石學の對象とみなした同時代の清朝考證學者とちがって、青柳は銘文の釋讀にはまったく關心を示さなかつた。そのかわり、倭にかんする記事のある『漢書』や『三國志』などの史書のほか、宋明代の文人になる

隨筆を読みこなし、鏡の年代を考え、倭王卑彌呼が魏帝から下賜された「銅鏡百枚」を念頭に「しかれば此鏡、蓋景初正始の物にして、吾怡土縣主等の物か」と述べ、福岡から多數の中國鏡が出土する歴史的背景を探ることにねらいを定めていたのである（拙論前掲）。

明治にはいると、西洋から考古學の研究法が導入される。東京帝室博物館の三宅米吉「古鏡」（『考古學會雜誌』一、一五、一八九七年）は日本の古墳から出土した漢・六朝代の鏡について、鈕、鈕座、内區、銘帶、外區などの部分名稱を定め、『西清古鑑』の鏡名を取捨選擇した命名法を試みた。しかし、銘文は「大抵無學の工人が時に隨て定文句を綴り合せたるものなるべし」と斷じるなど、同時代の中國における金石學の蓄積を輕視していた。八木契三郎『考古便覽』（嵩山房、一九〇二年）の「鏡鑑說」は隋の「古鏡記」や「五雜組」という小説隨筆類をおもに用いて解説し、京都大學着任前の濱田耕作（支那の古銅器に就て）『國華』一六三、一九〇三年）も『洞天清錄』など宋明代の古銅器鑑定法を詳しく紹介し、『五雜組』も參考にしていた。明治時代の考古學は、次章にみる同時代の中國でさかんな考證學としての金石學とはあまり接點をもたず、むしろ宋明代の文人趣味としての隨筆や類書を參考に議論していたのである。

三 清朝考證學と鏡銘の研究

圖録の敍撰 清代になると、哲學に偏重した宋學にたいする批判が強まり、語音と字義の分析から古典籍を正確に理解しようとする考證學が發展した。そのなかで金石文が經典や史書を補うことに注意され、實證主義に立つ金石學の隆盛をみるにいたった。その嚆矢となったのが、乾隆帝が梁詩正らに命じて宮中所藏の古銅器を収録させた『西清古鑑』（一七五五年）である。古鏡を収録した卷三十九・卷四十は「博古圖録」にならって線畫の描き起し圖と紋樣や銘文の解説を加えたが、鏡を宇宙の表象とみるその分類法を繼承することはなかった。収録された鏡は九三面、鏡の命名は『博古圖録』を踏襲し、漢鏡と唐鏡とに大別するが、時代判定の根據は十分でない。乾隆帝はつづいて『西清續鑑』甲編・乙編

(一七九三年)を編纂し、寧壽宮に隱居した乾隆帝が編集を命じた『寧壽鑑古』は一九二三年にいたって上海商務印書館から景印された。これらの最大の功績は清朝における金文學の勃興の機運をなしたところにあるだろう。

鏡銘の考證學 このような敕撰の著録にたいして、錢坫『浣花拜石軒鏡銘集錄』(一七九七年)は私藏する二五面の古鏡について、描き起こし圖、面徑、銘文の釋文などを記録したものである。錢坫は『說文解字』や金文に精通した古文字學の研究者であり、前漢鏡の抒情的な「秋風起」・「君有行」・「精白」・「日有熹」銘にはじめて注目し、假借字に留意しながら正確な釋讀を試みた。また、「元興元年」銘鏡をとりあげ、紀年銘鏡の存在を明らかにした意義も大きい。鏡銘の精細な考證は錢坫にはじまるといって過言ではあるまい。

同年に刊行された畢沅・阮元『山左金石志』(一七九七年)巻五に鏡銘の書き起こし、面徑、釋文とその解説を載せる。鏡全體の圖はないが、「幽凍三商」・「車生耳」・「澧(醴)泉」・「五月丙午」の考證のほか、いくつかの假借字をあげ、「周仲作竟四夷服」ではじまる七字句が毎句末で押韻し、「廣韻」の字音にしたがって「服」・「息」・「力」が入聲「職徳」部、「復」・「熟」が入聲「沃燭」部であることを論じた。鏡銘の押韻を論じたのは、これが最初である。

馮雲鵬と馮雲鵠の兄弟によって編纂された『金石索』(一八二二年)は、『金索』巻六に古鏡一七四面を収録する。描き起こし圖を實物大に載せ、『山左金石志』を受けて銘文を詳しく解説している。その貢獻のひとつは年代論にある。「新銀治竟」や「新有善銅」銘をもとに新莽鏡を設定し、「大泉五十」錢紋をもつ鏡を同時期に位置づけた。また、六朝廻文鏡や六朝靈鏡など六朝鏡を設定したことも新しい試みである。ただし、それらは個々の鏡について年代を考證したものであって、鏡を分類し、その様式を論じたものではなかった。

相前後して梁廷枏『藤花亭鏡譜』(一八四五年)や陳經『求古精舍金石圖』(一八二三年)などの著録があるが、二〇世紀になると、拓本を原寸大で石印した劉心源『奇觚室吉金文述』(一九〇二年)、端方『陶齋吉金錄』(一九〇四年)、陳介祺『董齋藏鏡』(一九二五年)、張廷濟『清儀閣所藏古器物文』(上海商務印書館、一九二五年)、徐乃昌『小檀欒室鏡影』(一九二

八年)、劉體智『小校經閣金文拓本』(一九三五年)などの圖録が出版されたほか、コロタイプ印刷を採用した羅振玉『古鏡圖録』(一九一六年)や梁上椿『巖窟藏鏡』(一九四〇―一九四二年)によって紋様と銘文が正確に再現され、考古學研究における実用性がさらに高まった。

銘文の考證學的研究は羅振玉の「漢兩京以來鏡銘集録」・「鏡話」(遼居雜著一九二九年所收)で大成された。それまでの著録が個々の古鏡についての解説にとどまっていたのにたいして、一九〇あまりの銘文を集成した「鏡銘集録」は鏡銘データベースの先驅けであり、「鏡話」は五一條からなる鏡銘の劄記である。ここではまず漢から清にいたる歴代の紀年銘鏡を網羅し、實際の干支とつきあわせて検討している。ついで、鏡銘の通假字を同時代の古典籍や碑刻から考證し、鏡銘にみえる偏旁や筆畫の省略字を列舉している。

四 戦前における日本の中國古鏡研究——編年重視の考古學

年代論のはじまり 明治から大正に時代が移った一九一〇年代は、日本の古鏡研究における大きな轉機であった。韓國併合にもなつて朝鮮總督府を中心にピョンヤン市郊外の樂浪漢墓の發掘がはじまり、多數の漢鏡が出土するようになった。翌一九一一年の辛亥革命で羅振玉と王國維が京都に亡命し、金石學にたいする關心が急速に高まった。そして、漢から六朝にかけての紀年鏡が相ついで知られるようになり、中國鏡の年代論に研究者の關心が注がれていったのである。

中國美術史の大村西崖『支那美術史彫塑篇』(佛書刊行會圖像部、一九一五年)や國文學の山田孝雄「古鏡の銘について」(『人類學雜誌』三〇―一―三一―二、一九一五―一六年)は漢鏡銘の重要性に着目し、紀年銘鏡を集成した。なかでも山田は、銘文を韻文としてとらえ、三字句や四字句の單純な銘文から、武帝代に數句からなる長銘があらわれ、前漢末・王莽代に七言句が毎句押韻する柏梁體がさかんになり、四六體がもてはやされた後漢末から六朝代に四言句の銘文が多くなつたと論じた。前漢鏡の実體がまったく明らかでなかつたときに、銘文からその實在を想定し、文學史の觀點から六朝代ま

での鏡銘の變遷を明らかにした意義は大きい。しかし、その後の研究が考古學の様式編年に偏重していったため、山田の研究は正しく繼承されなかった。

金石學の知識をもとに、考古學の様式論から鏡の年代をはじめて議論したのは富岡謙藏『古鏡の研究』（丸善株式會社、一九二〇年）である。まず「始建國二年新家尊」銘獸帶鏡や「王氏作竟……多賀新家」・「新有善銅」などの銘文をもつ方格規矩四神鏡を王莽代に位置づけ、そのうえで方格規矩四神鏡の内區と外區の紋様を検討し、多様な變異をもつ段階から王莽代の完備した紋様へと様式が發展したと考えた。ついで紀年銘をもとに神獸鏡が後漢中期に出現し、神仙思想のもてはやされた漢末から六朝代に盛行したと論じ、畫像鏡についても、東王公・西王母の神仙圖像のほか、後漢代の畫像石との表現の類似をもとに、後漢から六朝初期のものと推測した。いっぽう、青柳種信によつて記録されていた福岡縣三雲遺跡や同縣の須玖岡本遺跡から出土した草葉紋鏡や異體字銘帶鏡について、銘文の字形が中國出土の前漢代の瓦甃と類似し、六朝代の鏡より錫の含有比が多いことから、それら一括の出土鏡を前漢代に位置づけた。それは字形から前漢鏡をはじめて提唱しただけでなく、遺跡の發掘資料と理化學分析の成果を援用したことで注目できる。さらに、從來ほとんど知られていなかった「與天地相翼」などの銘文をもつ蟠螭紋鏡や「大樂貴富」などの銘文をもつ蟠龍紋鏡を紹介し、紋様表現が先秦時代の銅器に類似すること、銘文が草葉紋鏡や異體字銘帶鏡と共通すること、雷紋鏡と同じように七面縁をもつことをあげ、それらも前漢代に位置づけられることを論じた。また、日本出土の三角縁神獸鏡については、「銅出徐州、師出洛陽」銘から魏代の製作と考證したうえで、日本では前漢から王莽代の鏡が北部九州を中心に分布するのたいていして、神獸鏡や畫像鏡が畿内に多いこと、吳の年號をもつ神獸鏡が少なく、大部分が魏晉の三角縁神獸鏡であることから、魏帝から卑彌呼に贈られた『魏志』倭人傳の「銅鏡百枚」をそれにあてた。

濱田耕作は富岡の死後に刊行された『古鏡の研究』の序文のなかで、富岡は文獻學的研究よりはじめ、型式學的研究へと展開したと指摘する。漢鏡銘を古文獻から考證した富岡の研究は、濱田のことを借りれば、確かに従來の「典籍の索

引的繙讀を事とする徒輩の能くする所」ではなかったかもしれない。しかし、カールグレン (Karlgren, Bernhard, "Early Chinese Mirror Inscriptions", *Bulletin of Museum of Far Eastern Antiquities*, No.6, 1934) が逐一あげつらうように、「富岡の鏡銘の釋文には誤讀が少なくなかった。富岡のめざした目標は鏡式の設定とその編年にあつて、個々の銘文の釋讀に心血を注いだ清朝の金石學者とはベクトルがちがっていたのである。

研究方法の多様化

富岡謙藏以後、古鏡研究はおもに四つの方向に進められた。第一は編年の深化、第二は遺跡調査と地域性の検討、第三に漢以前の鏡の探索、第四に理化學的分析である。そのすべてを先導したのは、富岡の研究を繼いだ梅原末治である。梅原は遺跡や遺物の調査になみはずれた能力をもち、日本各地はもとより、朝鮮・中國・歐米の各地で中國文物を調査し、現地の研究者とひんばんに意見を交換した。一九二〇年代は中國で古學調査がはじまり、歐米でも中國文物にたいする關心がいちじるしく高まった時期である。中國考古學の情報は世界各地からいちちはやく梅原のもとに集まり、梅原から世界に向けて発信された。それは研究の國際化という點でも意義深いものがあつた。

第一の年代論について梅原『鑑鏡の研究』(大岡山書店、一九二五年)は、まず「王氏作鏡」や「新作大鏡」の銘文を根據に三角縁神獸鏡を王莽代に位置づけた高橋健自の説を批判し、方格規矩四神鏡を中心とする王莽鏡の論據を明確にした。ついで紀年銘鏡を集成し、編年の基準資料の整備につとめた。とくに梅原『漢三國六朝紀年鏡圖說』京都帝國大學文學部考古學資料叢刊一(桑名文星堂、一九四二年)は、紀年銘の釋文と解説、鏡の寫眞圖版が完備され、以後の研究に大きな便宜を與えた。梅原「支那古鏡概説」(『刪訂泉屋清賞』、住友吉左衛門、一九三四年)はまた、南齊の建武五(四九八)年銘鏡など四言句の銘文と浮彫りの獸形をもつ畫紋帶神(佛)獸鏡が六朝鏡を代表し、それが隋鏡に繼承され、自由にして華麗な表現の唐鏡が生まれるという一連の變遷觀を提起した。

第二の遺跡調査について、樂浪漢墓の調査は關野貞らが一九〇九年に二面の後漢鏡が共存した石巖洞甌室墓を發掘したことにはじまり、一九一六年には朝鮮總督府に古蹟調査委員會が設立され、組織的に調査されるようになった。梅原『鑑

鏡の研究』（前掲）は個人のコレクションもふくめて一五〇面あまりの鏡を集成し、漢鏡の出土数の變化は史書からうかがえる郡縣の盛衰と符合することを示した。後藤守一『漢式鏡』日本考古學大系（雄山閣、一九二六年）もまた二〇〇面近い樂浪出土鏡を集成した。いっぽう、一九二〇年代に中國で文物の盜掘と海外への流出が激しくなったことをうけて、漢以前の鏡について梅原『漢以前の古鏡の研究』東方文化學院京都研究所研究報告六（一九三五年）は淮河流域や洛陽金村から出土した戰國鏡を追跡し、それらを「地域的な一括遺物」と呼んで、年代や地域性を示す重要な資料とみなした。また、『紹興古鏡聚英』（桑名文星堂、一九三九年）では紹興から出土したと傳える畫像鏡や吳の紀年銘鏡を集成し、ベトナム北部から出土した漢鏡については、同じ邊境に位置する樂浪郡の出土鏡と比較した（『東京及安南北部發見の古鏡』『東方學報』京都一四一、一九四三年）。

第四の銅鏡の理化學的分析は、近重眞澄によつてははじめられた。近重『東洋古銅器の化學的研究』（『史林』三一、一九一八年）は各種の古銅器について顯微鏡による金屬組織の分析と銅・錫・鉛などの成分を分析し、『周禮』考工記の「金の六齊」と對比した。つづいて小松茂・山内淑人「古鏡の化學的研究」（『東方學報』京都八、一九三六年）は梅原末治と共同で戰國から明代にいたる中國鏡四九面と日本の出土鏡七面の計五六面を分析し、戰國鏡は銅・錫・鉛七五・二五、漢から唐の鏡は銅・錫・鉛七〇・二五・五、宋以後は錫が減少して鉛が八〜一九％に増加することを明らかにした。それをもとに梅原「古鏡の化學成分に關する考古學的考察」（『東方學報』京都八、一九三六年）は、地金の色や銹のちがいは成分によるものではなく、出土の状態ないしは出土地のちがいに由ること、中國鏡と日本の仿製鏡とは成分のちがいがほとんどなく、中國の原料ないしは製品の鏡を用いて仿製鏡がつくられたと考へた。

五 戰前における歐米の中國古鏡研究——シノロジーとしての考古學

鏡の實地調査と研究 一九一三・一九一七年にベルギーの醫師ブツカンは河南省鄭州市において空心軛墓を發掘し、異

體字銘帶鏡が五銖錢や褐釉陶器と共伴したことを確かめた（梅原末治「河南鄭州及び滎澤縣發見の漢代の墳墓と其の遺物」『東洋學報』一九一、一九三二年）。一九一六―一九二一年にはスウェーデンの技師カールベックが淮河流域において漢鏡より古い様式の鏡を多數入手した。その地域は前二四一年に楚の都となり、楚の滅亡後、前一九七年からは前漢の淮南國として築えたところで、戦國時代の楚様式から漢様式への變化を考える手がかりとして注意されたのであった。その後、カールベックは類似の鏡が内蒙古まで廣く分布することを確かめ、雲雷紋鏡、山字紋鏡、渦狀虺紋鏡、蟠螭紋鏡など七種類に分け、それらの年代を前三世紀から前二世紀前半に比定した（Karlsbeck, Oscar, "Notes on Some Early Chinese Bronze Mirrors", *China Journal of Science and Arts*, Vol.4, No.1, 1926）。いっぽう、洛陽東郊の金村では一九二八年に八基の大墓とそれに附屬する車馬坑から大量の文物が出土し、河南在住の牧師ホワイトはすぐさま遺跡とその出土品を追跡した（White, Charles William, *Tombs of Old Lo-yang*, 1934）。

紋様と銘文の文化史研究　歐米で中國古鏡を最初に詳しく論じたのは、ドイツ人のヒルトである。『博古圖録』・『西清古鑑』・『金石索』などの金石書や古鏡の傳承を集めた類書を博搜し、銅鏡の歴史、日本や中央アジアにおける中國鏡、鏡の用途、鏡の紋様について整理した（Hirth, Friedrich, "Chinese Metallic Mirrors", *Anthropological Papers Written in Honor of Franz Boas*, 1906）。論點は多岐にわたるが、なかでも鏡には化粧具としての用途のほか、採火に用いる陽燧や辟邪・治療・豫知の呪具としても用いられたこと、漢鏡の紋様は周代の銅禮器と異なり、張騫の西域開拓にもなつて圓鈕・葡萄・獅子などの新しい紋様が現れたことに注意し、古鏡の新しい研究を切り開いた。その後、イギリスのイエッツ（Yelts, W. Perceval, *The George Eumorfopoulos collection, Catalogue of the Chinese and Corean Bronzes, Sculpture, Jades, Jewellery and Miscellaneous Objects*, Vol.2, London, 1930）は銘文の釋讀と方格規矩四神鏡のTLV紋・四神・十二支銘について、スウェーデンのシエン（Sién, Oswald, *Histoire des arts anciens de la Chine*, I, Paris et Bruxelles, 1929）は戰國鏡と漢鏡の美術様式について、ドイツのキュンメル（Kümmel, Otto, "Neun chinesische Spiegel", *Ostasiatische Zeitschrift*, N.F. 6, 1930）も戰國鏡の様式について

独自の議論を展開している。

シノロジーとしての古鏡研究を大成したのは、中國語の近代言語學を確立したスウェーデンのカールグレンである。まず、周代の韻文である『詩經』をもとに上古音を復元し、つづいて上古音から中古音への過渡期にある二五七種の漢鏡銘を集成して釋讀するとともに、押韻、假借、字句を詳しく解説した(Karlgren *ibid.*)。緻密な言語學理論をとり入れた鏡銘研究であるとはいえ、このとき鏡の圖像紋様には無關心で、年代についても考慮していなかった。カールグレンはこの反省にたち、准式鏡の研究では、壽州と洛陽との地域性に留意しながら、漢鏡への編年をねらいに、集成した三一七面について主紋や地紋を單位紋様に分割し、それぞれの變化を検討することによってAからLの一一類(I類は未設定)に分類した('Huai and Han', *Bulletin of Museum of Far Eastern Antiquities*, No.13, 1941)。鏡銘の研究と同じように、網羅的な集成と體系的な分類をめざすカールグレンの方法は一貫していたのである。

以上のように二〇世紀前半の古鏡研究をみると、圖録の編集を別にすれば、銘文考證に没頭する中國、編年と歴史研究に傾く日本、シノロジーとしての文化史研究を進めた歐米、というベクトルがはっきりと區別できる。それは宋學と漢學の對立にはじまるパラダイムの分岐として理解することができるだろう。

六 戦後の中國古鏡研究——日本・中國・歐米における多様な研究の融合

發掘調査の進展 河南省洛陽市の燒溝墓地では、一九五三年に二二五基の漢墓が發掘され、墓室型式や陶器、貨幣などをもとに前漢中期から後漢後期にいたる漢墓が六期七段階に編年された(中國科學院考古研究所編『洛陽燒溝漢墓』、科學出版社、一九五九年)。出土した銅鏡一一八面と鐵鏡九面は一四種の鏡式に大別され、編年の指標として抽出した一三四基の墓との對應關係によつて各鏡式の使用年代が示された。その刊行と同じ一九五九年には洛陽市文物管理委員會編『洛陽出土古鏡』と陝西省文物管理委員會編『陝西省出土銅鏡』、翌一九六〇年には湖南省博物館編『湖南出土銅鏡圖録』と四川省

博物館ほか編『四川省出土銅鏡』が文物出版社より出版され、鏡の種類が地域ごとに異なることが理解されるようになった。その後は紀年墓や前一二三年に中山王劉勝を埋葬した河北省滿城漢墓など年代の特定できる墓の出土例が増加し、岡崎敬「鏡とその時代」(『立岩遺蹟』、河出書房新社、一九七七年)は前漢鏡の年代について體系的に整理した。

改革開放にともない、一九八〇年代より開發にともなう發掘が各地で急増していった。省市レベルでも調査體制が整えられ、文革以前の調査例もふくめて、まとまった發掘報告書が陸續と刊行されるようになった。前漢の都長安の周邊では一九八八年より八〇〇基以上の前漢墓が發掘され、西安市文物保護考古所などから『西安龍首原漢墓』(西北大學出版社、一九九九年)や『長安漢墓』(陝西人民出版社、二〇〇四年)として報告書が刊行されたほか、發掘を擔當した程林泉・韓國河は出土した漢鏡三三六面を收録した『長安漢鏡』(陝西人民出版社、二〇〇二年)を編纂した。また、長沙市内では一九五二～一九九四年に二〇四八基の東周墓が發掘され、陶器をもとに春秋後期から戰國末期までを四期九段階に分けている(湖南省博物館ほか『長沙楚墓』、文物出版社、二〇〇〇年)。そのうち四八一基の墓から四八五面の鏡が出土し、秦代に出現する細地紋鏡や雲雷地紋をもつ蟠螭紋鏡など前漢代に下る鏡がふくまれているもの(拙論「前漢鏡の編年と様式」『史林』六七・五、一九八四年)、羽狀地紋の山字紋鏡など多くは戰國後期の鏡であり、楚鏡のまとまった資料を提供している。廣州市内でも一九五三～一九六〇年に四〇九基の漢墓が發掘され、計一五七面の銅鏡が出土した(廣州市文物管理委員會ほか『廣州漢墓』、文物出版社、一九八一年)。墓室型式と陶器をもとに前漢前期から後漢後期まで五期に編年され、そのうち一八二基の前漢前期墓から戰國後期の楚鏡をふくむ五九面の鏡が出土した。とりわけ、前一二二年前に没した第二代の南越王の墓が發見され、未盜掘の墓室から計三九面の鏡が出土したこと(同『西漢南越王墓』、文物出版社、一九九一年)は、前漢前期の資料が脱落していた『洛陽燒溝漢墓』を補う成果として重要である。

このような出土鏡は、製品となった鏡が流通し、使用された最後の局面をあらわしている。鏡の正確な制作年代や製作地については、以下に述べるような型式學的方法や銘文の解釋と組みあわせて論じる必要がある。また、鏡が墓中での

ようにとりあつかわれていたのか、戦前では日本人が発掘したピョンヤン市の樂浪漢墓しか手がかりのなかった鏡の使用法などについても、確かな證據が積み重ねられていったのである。

型式學的研究

鏡の編年は、紋様とその構成をもとに、草葉紋鏡や内行花紋鏡といった鏡式に分類することからはじまった。富岡謙藏や梅原末治によつてはじめられた鏡式編年は、前節に述べたような新中國の發掘例をもとに、樋口隆康『古鏡』（新潮社、一九七九年）や孔祥星・劉一曼『中國古代銅鏡』（文物出版社、一九八四年）などの專著によつて體系化された。つぎなる課題は、數十年から百年あまりの時間幅をもつ各鏡式を紋様や銘文から細かく型式分類し、型式變化の系列を跡づげるとともに、鏡式を横斷する型式の竝行關係を確かめ、墓の發掘資料をもとにその編年を検證することである。それが型式學的研究法である。

三角縁神獸鏡という一つの鏡式について屬性の抽出とその分類をもつとも精緻におこなつたのは小林行雄「三角縁神獸鏡の研究」（『京都大學文學部紀要』二三、一九七一年）である。まず内區の神獸像配置によつて二四型式に分類し、ついで神像と獸形の表現、銘文の種類とその配置、内區外周の紋様帯などの屬性との相關を示した。この方法をふまえ田中琢「方格規矩四神鏡系倭鏡分類試論」（『文化財論叢』奈良國立文化財研究所創立三〇周年記念論文集、一九八三年）は、方格規矩四神鏡を模倣した倭鏡について、主紋の獸像がしだいに退化する一連の變化系列を想定し、それをほかの單位紋様との相關をもとに檢證することによつて型式分類と編年をおこなつた。田中と同じ方法によつて西村俊範「雙頭龍文鏡（位至三公鏡）の系譜」（『史林』六六一、一九八三年）は後漢代の雙頭龍紋鏡について型式分類と編年を實踐した。

しかし、それらは各鏡式の個別的な研究であつた。拙論「前漢鏡の編年と様式」（前掲）・「後漢鏡の編年」（國立歷史民俗博物館研究報告）五五、一九九三年）は、漢代の各種の鏡式について紋様と銘文の屬性分析をもとに編年するとともに、鏡式を横斷する屬性の共有關係から鏡式間の竝行關係を明らかにし、墓の發掘例からこの相對編年の檢證をおこなつた。各型式に實年代を比定するには、銘文から鏡の製作年代を考證するほかに、墓の出土例から鏡の使用時期を檢討する方法が

ある。それには、①年代の判明している墓からの出土、②紀年銘遺物や銅銭との共伴関係、③墓室や副葬土器などの編年との相関、④鏡どうしの共伴関係などがある。それぞれの状況を考えながら製作年代による編年を構築し、さらに紋様や銘文にあらわれた様式をもとに漢鏡を七期に大別した。

鏡の銘文には一定のパターンをもつものが多い。樋口隆康「中國古鏡銘文の類別研究」(『東方學』七、一九五三年)は、例数の多い銘文を完全な形に校勘のうえ二九種に分類し、それと鏡式との相関を數量的に分析した。これは鏡式レベルの分析であったが、近年では、語句單位の數量分析がおこなわれている。林裕己「漢鏡銘について(鏡銘分類概論)」(『古文化談叢』五五、二〇〇六年)はP・Cを用いて一萬件以上の鏡銘データベースを作成し、文字や語句單位の相関關係を分析することによって、三角縁神獸鏡など特定の鏡式に用いられた語句の抽出に成功している。紋様と同じように銘文もまた型式學の屬性として分析でき、編年や地域性の議論に寄與することが明らかになったのである。

しかし、紋様や銘文を類型化・記號化し、P・Cを用いて數量的・機械的に分析する手法は、鏡それぞれの個性をしばしば見落としてしまうことになりかねない。大がかりな工房でパターン化された銅鏡を生産していた前漢代なら、そのような方法は有効だが、官營工房とされる「尙方」から「青蓋」や「杜氏」らの鏡工たちが相ついで自立した後漢代には、小さな個人經營の工房名を銘文にかかげ、民間の市場に向けて獨特の銘文や圖像紋様をもった藝術性の高い鏡が競うように創作されていったから、従来のようにいきなり紋様の型式分類からはじめる紋切型の手法ではなく、作鏡者名を手がかりに作品を個々に分析することから時代や地域の様式に議論を展開させる作家論の手法を併用する必要がある(拙論「漢鏡五期における淮派の成立」『東方學報』京都八五、二〇一〇年)。

地域性と流派 新中國になって各地で發掘が進められ、確實な出土鏡が増加したことによって、鏡式の地域性が明らかになってきた。さらに圖像紋様や銘文を細かく觀察することにより、鏡式レベルの地域性にとどまらず、型式レベルで工人や工房の製作動向を跡づける研究がはじまった。なかでも注目されているのが、戰國鏡と後漢・三國代の鏡である。

楚鏡とされる山字紋鏡の鑄型が、戦国時代の河北省易縣燕下都遺址で採集されている。その鑄型から復元される鏡の大きさは八・八―一〇・八センチと小型で、いずれも四山字紋鏡に分類される型式である（廣川守「戦国時代羽狀獸紋地鏡群の規格と文様構造」『泉屋博古館紀要』二二、二〇〇五年）。山字紋鏡のほとんどは楚の領域から出土しているが、鑄型の出土により燕で山字紋鏡がつくられていたことはまちがいない。他人のそら似か、楚鏡を燕で模倣したのか、地域や國をこえた工人の移動があったのか、まだ解決をみるにいたらないが、筆者は楚から燕に鏡工の一部が移動した可能性が高いと考えている（『中國古代の青銅器生産』『國學院雜誌』一〇九―一一、二〇〇八年）。

近年では山東省臨淄の齊國故城から前漢中期の草葉紋鏡などの鑄型が多數出土し（中國山東省文物考古研究所ほか『山東省臨淄齊國故城漢代鏡範的考古學研究』、科學出版社、二〇〇七年）、製品のひろがりから製作地を推定する分布論をこえた研究が可能になっている。筆者は、長安で制作された前漢鏡群を検討するなかで、臨淄から出土する草葉紋鏡の鑄型は前一一〇年代の限られた型式であることから、長安の一部の鏡工が臨淄に移動して短期間の操業にたずさわったと考えた（『漢鏡二期における華西鏡群の成立と展開』『東方學報』京都八三、二〇〇八年）。いまだ地表面での鑄型採集にとどまっており、鏡の工房址が発掘されれば、そうした鏡生産の實態がいつそう明確になるであろう。

いっぽう、三角縁神獸鏡の製作地をめぐる議論のなかで、後漢・三國代の鏡が注目を集めている。湖北省鄂州市から出土した黃武六年（二二七）銘神獸鏡には「會稽山陰作師鮑唐……家在武昌」という銘文があり、長江下流域の會稽郡山陰縣から鏡工人の鮑氏らが長江中流域の武昌に移住して吳鏡が製作されたことが明らかになった（王仲殊「尾形勇・杉本憲司譯」『三角縁神獸鏡』、學生社、一九九八年）。銘文から鏡工人を特定し、圖像紋様の細かい型式學的な分析を進めるならば、神獸鏡という鏡式レベルの地域性ではなく、型式レベルで工人の流派や製作動向を説明する道が開かれよう。

岸本直文「三角縁神獸鏡製作の工人群」（『史林』七二・五、一九八九年）は、三角縁神獸鏡の神獸像表現を一二種に分け、單位紋様との相關をみることによって、工人の系統に四神四獸鏡群・二神二獸鏡群・陳氏作鏡群の三派があり、相互に連

携しながら製作していた状況を復元した。これは三角縁神獸鏡の編年、ひいては日本の古墳編年に大きく寄與するものとして注目され、中國鏡の製作動向を考えるうえでも、鏡式レベルから型式レベルの分析へと進める意義をもっていた。これをうけて上野祥史は、後漢代の神獸鏡・畫像鏡・盤龍鏡それぞれの製作動向を分析し、作鏡者名をもとにその系列をまとめている。たとえば、畫像鏡について尙方系・吳郡系・袁氏系など七系列に分け（「畫象鏡の系列と製作年代」『考古學雜誌』八六・二、二〇〇一年）、神獸鏡の系列とあわせみることによって、魯を中心とする華北東部地域や會稽郡に中心をおく錢塘江流域などの地域系列に整理した（「盤龍鏡の諸系列」『國立歷史民俗博物館研究報告』一〇〇、二〇〇三年）。しかし、このような地域系列が検討されてきた反面、三角縁神獸鏡とその起源が魏鏡か吳鏡かを峻別しようとするあまり、後漢鏡をふくめた系列を小地域ごとにふり分けることに力が注がれ、鏡式や地域を横斷する竝行關係が輕視されてきたことは否めない。後漢代になると、個性的な鏡をつくる鏡工が民間に輩出し、同一工房や同一地域内でも多様な鏡が創作されるいっぽう、地域をこえた交流や鏡工の移動がいつそう活發化した。たとえば、後漢章帝のころに「朱師」や「柏師」ら吳派の創作した畫像鏡は、盤龍鏡や獸帶鏡を制作していた淮派にまもなく受容されたが、そのモチーフは「杜氏」「呂氏」「淮南龍氏」「池氏」など鏡工ごとに大きく異なっていた（前掲「漢鏡五期における淮派の成立」）。吳派と淮派とは、地域は離れているとはいえ、鏡工ないしは工房の單位でさまざまに交流していたことはまちがいない、しかも淮派の「杜氏」らはひとつの工房で盤龍鏡・獸帶鏡・畫像鏡など各種の鏡式を制作していたのである。

銘文の文學・思想史的研究

カールグレンの音韻論は藤堂明保に批判的に繼承され、その成果を用いて西田守夫「神獸鏡の圖像」〔MUSEUM〕二〇七、一九六八年）は神獸鏡の「白牙舉樂」銘を考釋した。笠野毅「中國古鏡銘假借字一覽表（稿）」（國立歷史民俗博物館研究報告）五五、一九九三年）は藤堂の成果をもとにした三七七例の假借字の集成である。また、李新城「東漢銅鏡銘文整理與研究」（華東師範大學研究生博士學位論文、二〇〇六年）は、音韻論によりつつ、傳世文獻と出土文獻の兩方にひろく假借字の例證を求めて漢鏡銘を網羅的に分析した。このような古文字學の研究により、漢鏡銘の釋讀

はいっそう確實性を増すことになった。

漢鏡銘を文學史のなかに位置づける研究がはじまった。小川環樹「漢代文學の側面」(『書道全集』二、月報一九、平凡社、一九七二年)は、韻文の一種である鏡銘について前漢から後漢への變化を概論した。前漢鏡の銘文には戰國から前漢代にかけて成立した『楚辭』の影響がみられ、拙論「前漢鏡銘の研究」(『東方學報』京都八四、二〇〇九年)はそうした鏡銘には『楚辭』と共通する詩形の變化が認められること、錢坫『沅花拜石軒鏡銘集錄』が「妻贈夫詩」と呼ぶ前鏡銘のなかには陳の徐陵『玉臺新詠』卷九に收める蘇伯玉妻「盤中詩」と酷似する抒情的な三言句があることを明らかにした。三澤玲爾「楚辭と漢鏡銘」(『神戸國際大學紀要』四六、一九九四年)はまた、楚辭系の銘文も親しみやすい慣用句をふくむ祝福のための歌謠であったと論じた。拙論「前漢鏡の編年と様式」(前掲)は前漢鏡を四期に區分し、二期には現實的な快樂を希求する銘文、二期・三期には『楚辭』の系統をひく悲哀の銘文、四期には漢鏡二期のような現實の快樂を求める銘文、つづいて神仙思想や儒教思想をあらわした銘文、王莽の政治理念を唱えた銘文に變化していることを明らかにし、前漢鏡の銘文には世相のうねりが反映されていることを論じた。

後漢鏡になると、圖像に西王母や東王公があらわれ、神仙世界を描寫した銘文が多くなる。玉田繼雄「漢代における樂府の神德歌辭と鏡銘」(『立命館文學』四三〇～四三一、一九八一年)は、前漢から後漢末期までの鏡銘と樂府の歌辭とを對比しながら神仙思想の受容の變遷を検討し、後漢代の樂府において神仙的祝頌語が發展して神仙世界や仙遊を主題として歌う歌辭が出現し、鏡の銘文にも同様の狀況がみいだせるが、後漢末期には樂府において神仙を追究することの虚しさを嘲笑する語が登場し、鏡の銘文に神仙的吉祥語が減少消失することを指摘した。

いっぽう、思想史の立場から内野熊一郎『中國古代金石文における經書讖緯神仙說攷』(汲古書院、一九八七年)は、鏡銘にあらわれた神仙・讖緯・祥瑞説を網羅的にとりあげ、笠野毅「清明なる鏡と天」(『考古學の新視角』、雄山閣出版、一九八三年)は「黍言之始自有紀」などではじまる銘文の「紀」の意義、あるいは「清且明」など鑄造にかかわる銘文の意義

を、緯書をふくむさまざまな文献を涉獵して考證した。鏡は剛強銳利な金屬の性質をもつため、清明なる天の氣に通じる規範法則（紀）を自らに備えたものと考えられ、この規範によって災異が退けられ、福祿壽などの世俗的な幸福がえられと觀念されていたという。これは漢代における鏡の使用を考えるうえで重要な視點であらう。

一九九〇年代からの新しい研究として、漢鏡銘の電子化が進んだことが特筆できる。臺灣では林素清が漢鏡銘のデータベース「兩漢鏡銘集録」を作成し、中央研究院歴史語言研究所が開設しているホームページ「簡帛金石資料庫」に一七四五例を収録している。石碑銘などほかの出土文字資料と一體化しているため利用價值が高いが、鏡銘の釋文は基本的に報告にしたがっているため、釋字に問題のある銘文が少なく、日本で出版された圖録類の鏡銘が収録されていないのも問題である。

しかし、考古學と文學・哲學との共同研究は、なお不十分である。樋口隆康や林裕己によって漢鏡銘の典型例とその年代が示され、林素清のデータベース「兩漢鏡銘集録」が作成されて檢索がたやすくなったものの、カールグレン以來七〇年あまり、考古學や歴史學はもとより、文學や哲學の研究者が利用しやすい形で鏡銘が總覽できる注釋の作成がなおざりになっている。そこで、筆者は京都大學人文科學研究所の共同研究「中國古鏡の研究」班を組織し、時期ごとの鏡銘集釋の作成にとりかかった。その成果はすでに「前漢鏡銘集釋」（『東方學報』京都八四、二〇〇九年）および「後漢鏡銘集釋」・「三國西晉鏡銘集釋」（同八六、二〇一一年）としてまとめ、いま「紀年鏡銘集釋」の編集にとりかかっている。

圖像學的研究 漢鏡の圖像紋様にたいする研究は、戦後になっても歐米で活發におこなわれた。なかでも方格規矩四神鏡や神獸鏡（*Four Symbols and Mythical Beings*）（Bulling, A. Gunkind, *The Decoration of Mirrors of the Han Period*, 1959）やローウイ（Loewe, Michael, *Ways to Paradise, The Chinese Quest for Immortality*, 1979）は、その圖像紋様と宇宙觀をめぐって詳しく論じている。こうした歐米の圖像學に、嚴密な考證學の手法をとりいれた林巳奈夫『漢代の神神』（臨川書店、一九八九年）は、鏡の銘文と『晉書』天文志などにみられる古代の宇宙觀をふまえて圖像を仔細に考證した。鏡の編年に傾倒していた日本にあ

って、林の研究は清朝考證學と歐米のシノロジーとを融合した新しい地平を開拓したのである。

拙論「西王母の初期の圖像」(『歴史學と考古學』高井隼三郎先生喜壽記念論集、一九八八年)は前漢末期の方格規矩四神鏡に例外的にあらわされた西王母に着目し、その圖像配置から兩性を具有する西王母の性格を明らかにするとともに、東王公・西王母の男女神に分裂した畫像鏡への展開を検討した。鏡の圖像學的研究は、個々の圖像を考證するだけでなく、林已奈夫が實踐したように、圖像構成やその配置から鏡全體が表象する世界を分析し、さらにその時代的變遷を讀み解いて思想史的な位置づけをめざす必要がある。

文獻學からの研究

文獻學からの古鏡研究は、一九二〇年ころまでの歐米において、類書をもとに鏡の名稱や用途、鏡をめぐる習俗などが論じられた。その後は古鏡の出土と収集が飛躍的に増えたこともあって、文化史研究の比重は出土鏡の銘文や圖像に移っていくことになった。しかし、一九七〇年代にはいると、文學史や思想史の研究が多様化し、古典籍にみえる鏡の傳承にも關心がおよぶようになった。文學史のなかで注目されるのが隋の王度『古鏡記』であり、思想史では道教における鏡の呪術性について議論されている。なかでも福永光司「道教における鏡と劍」(『東方學報』京都四五、一九七三年)は、儒教經典には「歴史を鏡とする」比喩が強いのにたいして、莊子ら道家の哲學には道を體得した聖人の象徴として鏡をみる考えがめばえていことに注意し、それが六朝代の道教に繼承されたことを論じている。

こうした成果をうけて、考古學でも出土文字資料や墓における鏡の出土状況から鏡の役割が論じられるようになった。まず、出土文字資料から鏡の呼び方が前三世紀までは「鑑」、前二世紀には「鏡」になったこと、湖南省馬王堆一號墓の遣策によつて鏡にはそれを包む「衣」や鏡をぬぐう布がともなうこと、安徽省阜陽漢墓の竹簡『萬物』には「事到れば大鏡を高く懸けるなり」と呪術的な用途に鏡が用いられたこと、などが明らかになった。鏡の出土状況については杉本憲司・菅谷文則「中國における鏡の出土状態」(『日本文化の探求 鏡』、社會思想社、一九七八年)が漢墓の例を集成したが、王鋒鈞「銅鏡出土状態研究」(『西安文物考古研究』、陝西人民出版社、二〇〇四年)は殷周時代から宋明代までの例を整理し、文

獻にみえる傳承に照らしあわせて鏡をめぐる習俗の變化を論じている。また、劉藝『鏡與中國傳統文化』（巴蜀書社、二〇〇四年）は文献にみえる鏡の用途や習俗について網羅している。

鑄造技術論

戰國鏡や前漢鏡の鑄型が河北省や山東省などから出土していることは前述したとおりだが、日本の古墳時代研究において鏡の「同範」と「同型」または「踏み返し」が大きくとりあげられている。その先鞭を切ったのは梅原末治「本邦古墳出土の同範鏡に就いての一二の考察」（『史林』三〇・三、一九四六年）であり、三角縁神獸鏡の同範鏡論を用いて古墳時代の王權を論じたのが小林行雄『古墳時代の研究』（青木書店、一九六一年）である。その後、技術論で新たな局面を切り開いたのが八賀晉「仿製三角縁神獸鏡の研究——同範鏡にみる範の補修と補刻」（京都國立博物館『學叢』六、一九八四年）で、微細な觀察にもとづいて同範鏡の範の補修と補刻のプロセスを明らかにした。この方法を用いて川西宏幸『同型鏡とワカタケル』（同成社、二〇〇四年）は、中後期古墳から出土する踏み返し鏡の先後關係を分析し、倭の五王が南朝の宋に朝貢することによって入手したと結論づけた。高精度の機器を用いた水野敏典・山田隆文編『三次元デジタル・アーカイブを活用した古鏡の総合的研究』（二〇〇五年）も今後に有望な手法であろう。

理化學的分析

原料の産地同定でもっとも大きな成果をあげたのが鉛同位體比分析である。馬淵久夫・平尾良光「鉛同位體比法による漢式鏡の研究」（MUSEUM）三七〇、一九八二年）・「鉛同位體比法による漢式鏡の研究（二）」（同三八二、一九八三年）は、前漢鏡は華北産のA領域、後漢・三國鏡は華中・華南産のB領域に屬し、後者のうち三角縁神獸鏡と吳鏡とは微妙な差異があることを明らかにした。考古學からこれを批判する新井宏一「鉛同位體比による青銅器の鉛産地推定をめぐる」（『考古學雜誌』八五・一二、二〇〇〇年）は、その計測値を承認しつつ、A領域を山東・遼寧省、B領域を華南十河北・遼寧省と讀みかえた。産地同定は今後の課題としても、時代ごとに分析データにちがいがいることはまちがいがなく、考古學による編年や地域性の議論と照らしあわせて検討してゆく必要がある。

いっぽう、戦前より銅鏡の成分分析はつづけられているが、泉屋博古館古代青銅鏡放射光螢光分析研究會「Spring 8

を利用した古代青銅鏡の放射光螢光分析」(『泉屋博古館紀要』二〇、二〇〇四年)は、産地のちがいを反映しやすい微量成分のAg/Sn値とSb/Sn値を比較し、戦國鏡、漢初螭紋鏡、漢三國鏡の三グループに分かれたという。しかし、「廣漢西蜀」延喜二(一五九)年銘神獸鏡や吳の紀年銘鏡をはじめ、銘文や鏡式から多様な製作地が想定できるにもかかわらず、漢三國鏡がひとつのグループにまとめられており、分析データの解釋についてさらなる検討が必要であろう。

おわりに

一千年におよぶ古鏡研究を顧みると、宋學から漢學へのパラダイム轉換、一九世紀における日本の國學と漢學との没交渉、二〇世紀前半における中國・日本・歐米のパラダイム乖離は、まことに顯著なものであった。戦後は歐米の圖像學や音韻論が日本の研究に影響を與え、編年に偏っていた日本の古鏡研究が多様化したことはまちがいない。しかし、日本の考古學では細かい型式學的研究による時空間の變化に焦點をあてた研究がますます深化しているのにたいして、中國では銘文の考證學が衰えて發掘データにもとづく舊來どおりの鏡式編年のまま足踏みし、歐米では圖像の文化史研究が細ぼそとつづけられ、國際的な連携ははかられていないのも事實である。こんにちの日本では自國をふくめた東アジア古代史にたいする社會的關心が高く、考古學の年代論をもとにした歴史復元に比重があるのにたいして、歐米では中國理解の一助として古鏡が研究されていることも確かであろう。研究のグローバル化が進んでいるいま、われわれは日本考古學に向けて研究を深化させるだけでなく、本論でみたような研究史をふまえ、世界に向けて、あるいは考古學以外の研究分野に向けて、どのような研究を發信すべきなのか、が問われなければならない。

A MILLENNIUM OF RESEARCH ON ANCIENT MIRRORS: PARADIGMS IN CHINESE ARCHAEOLOGY

OKAMURA Hidenori

The paradigms of academic studies of China have changed greatly in each era. The study of ancient Chinese mirrors has a history of one thousand years going back to the Song dynasty, and this article aims to position these studies in terms of changes in the paradigms. During the Song and Ming dynasties, epigraphic studies such as the *Bogu-tulu* 博古圖錄 from the Northern Song, the study of physical sciences such as the *Mengxi Bitan* 夢溪筆談 of Shen Kuo 沈括, the study as an antiquarian pastime of the literati of the Southern Song such as that in the *Dongtian Qinglu* 洞天清錄 of Zhao Xihu 趙希鵠, and the bibliographic study of classified reference works regarding popular customs about ancient mirrors in medieval novels were all conducted, but the aim of each of these studies was vastly different. Epigraphy, which developed as a field of the Qing school of Evidential Learning 考證學, followed the methodology of the *Bogu-tulu* in recording findings and advanced the analysis of inscriptions, but the method of classification that was influenced by study of the *Yijing* 易學 of the Song dynasty was not continued. In contrast in 19th-century Japan, Aoyagi Tanenobu 青柳種信, of the National-Learning 國學 school, recorded in great detail the figures of Former Han mirrors excavated from jar burials in the northern Kyushu region, and while he used many Song and Ming antiquarian works in his interpretations, he did not rely on contemporary epigraphic works. In Japan the study of ancient mirrors began in earnest with Tomioka Kenzō 富岡謙藏, who was well versed in epigraphy, employed archaeological typologies, and the archaeological study of greatly advanced with Umehara Sueji 梅原末治, who was a student of Tomioka. In the West the linguist Karlgren collected mirror inscriptions and made translations, and the cultural historic study of mirrors along with iconographic motifs advanced as a branch of Sinology. After the establishment of the modern Chinese state, archaeological excavations proceeded throughout China and it became possible to argue the dating and regional characteristics of mirrors with greater precision. In addition Western iconographic and phonology influenced Japanese research, producing a multiplicity of approaches. However, although in Japanese archaeology the tradition of research focusing on periodic variation on the basis of meticulous typological study is

deeply ingrained, the future task is likely to be international cooperation that aims at other fields of study beyond archaeology.

THE RITES OF FENG AND SHAN OF WUDI OF THE FORMER HAN: A CONSIDERATION OF POLITICAL SIGNIFICANCE AND RITUAL

MEGURO Kyōko

This article is an analysis of the Rites of Feng and Shan 封禪 performed by Wudi of the Former Han and an attempt to clarify imperial authority in ancient China through an analysis of the structure and significance of imperial rituals.

I first consider the significance and how the symbolism of the Rites of Feng and Shan were viewed among those who were part of the ruling structure during the Former Han dynasty. Performance of the Rites of Feng and Shan was planned on three occasions during the Former Han: in the last stages of the rule of Wendi and immediately after the accession to the throne of his grandson Wudi, and half way through the rule of Wudi. Although plans for the first two events ended in failure, by examining their background, one realizes that the Rites of Feng and Shan were recognized as rites that symbolized the firm establishment of the ruling system of the Former Han dynasty across the generations. In addition, according to contemporary discourse (Sima Qian's 司馬遷 *Fengshanshu* 封禪書 and Sima Xiangru's 司馬相如 *Fengshanwen* 封禪文) on planning for the third occasion, the Rites of Feng and Shan had the significance of positioning the Former Han dynasty as the legitimate successor for the Zhou dynasty that had previously unified China and ruled the nation with good government.

Next, I consider what sorts of rituals were actually conducted during the Rites of Feng and Shan. The Rites of the Feng and Shan had traditional rites formed by adopting Confucian thought and magical practices 方術 at their core. As an extension of these, the emperor would meet with regional officials and lords in the Mingtang and together perform worship rites to the gods worshipped by the Former Han dynasty. This was an extremely political and innovative ritual that demonstrated that Wudi, who had established a system of rule over the entire territory of the state and opened trade and communications with the states of the Western Region by successfully driving back the Xiongnu, had unified the realm as